

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
■文中で、旧 URL (<http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL (<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成14年度病害虫発生予察情報

特殊報第1号

平成14年10月31日

岩手県病害虫防除所

キュウリホモプシス根腐病(*Phomopsis sclerotiodes* Kesteren)の発生について

1. 発生状況

- (1) 平成14年9月上旬に、北上市(2圃場)および東和町(2圃場)の夏秋キュウリ栽培圃場で、地上部が萎ちょうし、根部が褐変腐敗する症状が見られた。また、平成14年10月上旬以降にも、花泉町(1圃場)および東和町(3圃場)の抑制栽培において同様の症状が見られた。何れの圃場でもカボチャ台への接ぎ木が行われている。
- (2) 被害根にホモプシス属菌の疑似子座が形成されており、顕微鏡観察したところ疑似微小菌核が確認された。
- (3) 県農業研究センター病理昆虫研究室で診断したところ、本症状は本県では未確認のキュウリホモプシス根腐病であると同定された。また、発生圃場から持ち帰った土壤に自根キュウリを植え、同一の症状が再現されている。
- (4) 昭和59年に埼玉県で初めて発生が報告され、その以降福島県、神奈川県等で自根および接ぎ木の何れの栽培でも発生が確認されている。

2. 病徴と被害

- (1) 初期には晴天の日中には萎ちょうし、朝夕や曇雨天日には回復する。これを繰り返して下葉から徐々に枯れ上がり、草勢が衰えて着果や果実の肥大が不良になる。
- (2) 被害は地温の低い時期に目立つ傾向がある。
- (3) 被害株の導管褐変は認められないが、地際部があめ色水浸状あるいは白色に腐敗する。
- (4) 根は初め細根が腐敗脱落(図1)、中・太根は淡褐色ないし褐色になって腐敗する(図2)。病徴が進むと根の表皮細胞に疑似微小菌核(黒色の菌糸の塊)が形成される(図3)。この組織の塊が局部的に黒色見え、疑似子座(粉炭状の黒色・不整形の病斑)として観察される(図4)。この根部表皮の症状の有無が本病を診断する上で重要なポイントとなり、他の病害や生理的な萎ちょう症状とは明らかに異なる点である。



図1 被害株の細根の腐敗脱落(左:被害根、右:健全根)



図2 根部の褐変

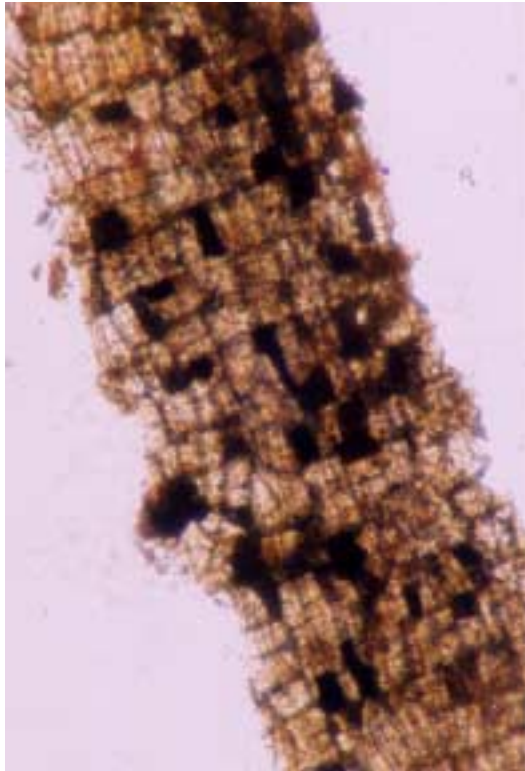


図3 光学顕微鏡(60倍)による表皮組織



図4 実体顕微鏡(20倍)による被害根部

3. 病原菌と伝染

- (1) 病原菌は不完全菌類に属する糸状菌で、培地上では柄子殻と柄胞子を形成するが、被害植物上での形成は確認されていない。キュウリをはじめウリ科作物全般を特異的に侵す。
- (2) 病原菌は被害植物の根部残査とともに土壤中に残存し、伝染源となる。
- (3) 土壤中における病原菌は地表 30cm までに多く分布する。
- (4) 病原菌の生育適温は 24～28℃だが、発病適温はこれより低温域である。熱には比較的弱い。

4. 防除対策

- (1) 本菌は地温を一定温度(38～40℃で24時間や46℃1時間等)で保つと死滅することから、太陽熱消毒や蒸気消毒等の熱消毒が有効である。
- (2) 耕種的防除
 - ① 生育期間中の地温を確保するとともに、著しい土壤の乾燥を避け、根の成長を促進し被害の軽減を図る。
 - ② 被害株は、早期に抜き取り焼却処分する。
 - ③ 本病の発生した圃場の耕起、整地を行った管理作業機は、そのまま無病圃場に使用すると、付着した土壤によって無病圃場も本病に汚染される恐れがあるので、作業機に付着した土壤は洗い落とす。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】

本 所 TEL 0197(68)4427

県北駐在 TEL 0195(47)1078

FAX (68)4316

FAX (47)3015

★この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/>